

行為の統合システムの生成

正 村 俊 之

1 序

人間と社会は行為の統合化の機能的焦点の差異のもとに分析的に区別された行為の統合システムである。両者は、それぞれ社会学の伝統的概念に従ってパーソナリティー・システム、社会システムと呼ぶことができる。本稿は人間と社会を二水準の行為の統合システムとして生成する統一論的理論と過程を分析することを主題としている。^{*}

^{*} 本稿は修士論文「行為の統合理論序説」の要約である。

主体としての行為の統合システムは、パーソナリティー・システム、社会システムの区別を問わず、環境と相互作用を行ない、主体にとって有意味になるように環境との相互作用を展開しようとする。その際、主体の適応能力には一定の限界が存在する。環境に対する主体の個々の活動の主体性と能動性を維持するには、主体は全体的活動内での各活動の位置づけと各活動に対する適正なエネルギーや資源の配分のための調整化を必要とする。行為の統合化とは、環境に対する適応化をはかるためのこうした活動の調整化であり、また調整の基礎としての諸行為の構造的連関化のことである。

ところで、行為は認識とともに人間活動の二側面を成している。認識と行為における秩序化をそれぞれ認識的秩序化、実践的秩序化と定義すれば、行為の統合システムは認識的秩序化に媒介された実践的秩序化として成立する。今日の失行症研究によれば、認識と行為は渾然一体とした未分化な活動の分化形態であることが知られている。認識と行為は象徴機能の介在によって未分化な形態から分化した形態へと移行する。象徴能力は行為の統合システムを高度な複雑性と安定性を備えた体系へと発展させる基本要因であり、象徴機能の介在による認識と行為の分化は、自在な認識活動と合目的かつ確実な実践活動を実現する。ただし認識と行為は分化した後も互いに他を潜在的に内在し、両者の間には相関関係が存在する。

認識的秩序化は、人間の場合象徴能力、とりわけ言語能力に基づく秩序化によって特徴づけられている。しかし認識的秩序化は象徴的操作に固有のものではなく、すでに感覚・知覚次元で行なわれている。しかも感覚・知覚による認識的秩序化と言語による認識的秩序化の間には一定の共通性が存在する。どちらにおいても要素の価値は、要素自体の孤立的、実体的性質によって決定されるのではなく、要素間の関係の中で決定される。ソシュールによれば、言語は示差的体系を構成しているが、知覚領野において主題として指定された対象は、非主題的对象を「地」にした「図」として弁別的に認知される。対象の知覚が対象間の「差異」として知覚されることは、換言すれば「差異」が感覚・知覚および言語に一貫して作用する認識的秩序化の基本原理である、ということである。

では、行為の統合システムは人間の象徴能力に支えられつつ、認識的秩序化(の原理)に媒介されて、いかにして生成されるのであろうか？

2 パーソナリティー・システムの統合化

最初にパーソナリティー・システムから考察することにして。日常生活世界の中で成人の行為は、右手と左手の連動的組織化から単一目的遂行のための身体的動作の組織化、さらに広範囲の時間的、空間的展望のもとでの複数目的遂行のための諸動作の組織化に至るまで重層的に組織化されている。こうした行為の重層的組織化は、個体の発達史の過程で認識上の操作能力の発展に平行して実現されるのであって、生まれながらにして所与であるのではない。

(1) 分節—統合の原初的段階

メルロ・ポンティによれば、人間の最初の社会的関係は、「癒合的 (synchrétique)」関係である。自己と他者は未分化の関係にあるばかりでなく、「私の志向が他人の身体に移され、他人の志向が私の身体に移される」「一つの全体として働くような一つの系」(「眼と精神」メルロ・ポンティ PP 135—136)の中に生きている。自—他関係の原点としての「癒合的」対人関係は自—他生成に関するいくつかの重要な帰結を導出する。

第一に、自—他の「癒合性」は、主体が自己の行為を認識的、実践的に統合化していないこと、そして他者の行為を認識的に統合化していないことを意味している。行為の統合システムの成立は、自己(他者)の行為が自己(他者)の身体的動作の連続として、身体的主体によって統御されることを前提にする。自己の志向が他者の身体を通して働き、他者の志向が自己の身体を通して働くなら、行為の統合システムは形成されない。幼児は、統合システムの解体した失行症患者と多くの現象的類似性をもつが、幼児における行為の統合化の未完成さは「癒合的」対人関係に起因している。

第二に、「癒合的」対人関係は、第一の論点から行為の統合化と自—他の分節化の必然的相関性を帰結する。「癒合的」対人関係が行為の統合化を阻害するとすれば、行為の統合システムの形成は「癒合的」対人関係の乗り越え、すなわち自—他の分節化を必要とする。実際、行為の統合化と自—他の分節化は楯の両面として同一現象のもとに発展する。そして行為の統合化と自—他の分節化との相関性は、個別主体としての自己生成と他者生成との相関性でもある。自己が自己を意識するのは自己を他者ではない存在として、他者を自己ではない存在として意識する限りである。

第三に、第一の論点と第二の論点から自—他生成における実践的秩序化と認識的秩序化の相互規定性が帰結される。行為の統合化が自—他分節に相関して展開されるなら、認識的秩序化としての他者の行為の統合化は、実践的秩序化としての自己の行為の統合化にとって不可欠の契機となるはずである。

さてピアジェの言う「感覚—運動期」— 知能を構成する諸操作の物質的訓練期間 — から象徴機能の出現によって特徴づけられる「表象期」への移行は、行為の統合化にとっても重要な時期である。この時期に「鏡像体験」と呼ばれる経験がなされる。「鏡像体験」とは身体に対する表象と視覚像の獲得を通じて全体としての自己身体を体験することである。「癒合的」対人関係に終止符が打たれるのは、自己(他者)の身体的諸動作は、すべて自己(他者)の意図の発現形態であることが了解された時である。こうした自己の志向性と自己身体、他者の志向性と他者身体との対応化は自己身体と他者身体の個別性と孤立性という物質的基盤のもとで確立される。ところが、自己自身は自己

にとってその全貌を現わすことはない。自己身体の全体像を統一的姿態において可視化するために何らかの媒介的手段が必要とされる。鏡像の役割は自己身体を一つの完全な視覚所与とすることにある。

幼児は、生後6ヶ月頃から鏡像に対して反応し始めるようになるが、鏡像に対する反応は、即「鏡像体験」に結びつくのではない。「鏡像体験」は、像に対する象徴的意識の発達および実体と象徴物との対応関係に関する整序性の判断能力の発達によって各鏡像が各実在身体に対応づけられてはじめて、自一他分節の契機となる。それゆえ「鏡像段階」は「感覚—運動期」から「表象期」への移行期に位置する。自己の身体像は、象徴操作の中で他者身体（像）を「地」にした「図」として知覚され、自己の恒常性と同一性は、知覚の弁別的機能のもとで他者との「差異」において成立する。

ただし、自一他の「差異」を確定する認知的秩序化と、鏡像身体と実在身体との認知的対応化の操作は自一他分節の成立の必要条件であって十分条件ではない。自一他の分節化はさらに自己の鏡像身体に対する「同一視」という、認知的対応化の操作には還元できない特異な心的作用を必要とする。身体像に対する「同一視」は自我形成過程で発生するアンデンティティーの原基的形態である。こうして自我の形式的分節化とともに行為の原初的統合システムが確立される。

(2) 分節—統合の発展的段階

象徴作用は観念の上で行為に対する「変換」「対応づけ」等の諸操作を可能にし、行為に対する自由な調整を実現する。本能に支配されない人間行為の可塑性は、象徴的操作能力の内面化とともに、漸次行為の一貫性や確実性に結合し、それに伴って一層高次の行為パターンが創出される。行為主体は他者あるいは自己の行動の中に一定のパターンを解釈、案出しつつ、それを実践次元に転化して行為の統合システムを形成する。

パーソナリティー・システムの中で一定の統合水準にある諸システムを総括して〈統合体制〉と呼べば、パーソナリティー・システムの〈統合体制〉は、「表象期」、「具体的操作期」、「形式的操作期」という思考の不連続的、段階的発展に相関して発展すると考えられる。象徴機能の出現する「表象期」にパーソナリティー・システムの原初的な〈統合体制〉が確立し、「形式的操作期」に基本的に完成された〈統合体制〉が成立する。

基本的完成度に達した「パーソナリティー・システム」の統合状態を理解するにあたって、役割葛藤の事実は示唆的である。役割葛藤の事実は、主体の中で役割群は内的連関性もなく、あるいは矛盾した状態のまま並存してはならないこと、すなわち役割群は何らかの一貫した関係のもとに統合化されなければならないことを意味している。このことから「パーソナリティー・システム」は主体の取得した役割としての行為パターンの上に役割群を貫徹する統一的、個性的な行為パターンが重層的に形成されたシステムである、と予想される。自一他は、自己による他者の態度の内面化によって要素的な役割行動形態として見れば同型であっても、取得した役割の束として見れば身体的個別性によって異型である。異型の役割群を全体的に統合化した「パーソナリティー・システム」は必然的に個性化する。そしてこのような「パーソナリティー・システム」は「形式的操作期」に成立する。一定の抽象的操作によって獲得される行為パターンの相互連関化とその体系に関する整合化と

安定化のための均衡点を見出す操作は「具体的操作期」の段階では不可能だからである。

パーソナリティー・システムの発展過程はシステム内の構成要素の全体的調整化と平衡化を可能にする体制の成立を所与として役割が連続的に内面化される過程ではない。行為の構造的連関性を備えた「パーソナリティーシステム」は、多数の役割の内面化とともに主体にとって複雑化した状況に対する適応化のための内実的統合化の必要性と象徴的操作能力の発達という統合化の可能性に関する二つの規定要因の成立によって生成される。主体の行動は、最初、各役割ごとに一定の限定化された時間性と空間性の範囲内で個別的に規定されてきたが、自我形成過程で、それまでの役割諸行為の並存化を可能にしてきた時間的、空間的限定性の境界枠がはずされ、各役割行為は開放化された時間的、空間的展望のもとに遂行されるようになる。

構造的体系性を有する「パーソナリティー・システム」の実体は、「自我」に対する解釈のうち提示することができる。二重の意識体験を伴う自我形成の時期は、「青年期」であり、ほぼ「形式的操作期」に一致する。自我が自己像＝客我に対する明瞭な意識化とともに確立される理由は、原初的レベルで行為の統合化＝自－他の分節化が鏡像としての自己身体像を必要としたのと同じと言える。「鏡像体験」と自我体験は、行為の異なった統合水準に照応した統合化＝分節化の契機としてある点で相違するが、行為の統合システムの生成に果たす役割とその生成論理は共通している。自我の形成過程とは、自己の取得した役割を土台に、「鏡像体験」に比すことのできる — たゞし一層高次の — 自－他分節の契機となるべき意識体験を伴いつつ、個体独自の統合様式に従った行為の全体的統合化の過程である。そして自我とは、その過程において主体の個性化された全体的な統合パターンに対するイメージとして意識化された「客我＝自己像」と、それを定立する意識作用および行為のパターン創出主体としての「主我」との統一体である。

自己像の確立とともに形成される性格は、外向性－内向性、能動性－受動性、陽性－陰性……のように二項対立をなす一連の弁別的特性の束として規定されている。役割の多くが時間的、空間的に限定化された一定の場における、主体の特殊性に無関係なパターンであるのに対して、性格規定要因としての弁別的项目は、主体の個体的変異に対する規定として役割行為パターンを横断し、時間性、空間性に対して無限定的な行為パターンを表示する。主体の行為の全体的パターンはこれらの弁別的项目の共起的な束として表現される。*

- * 自己像は性格以外に自分と同一視している欲求、感情、意志や良心、主義主張、生活習慣など、さまざまな構成要素から成り立つとされている。しかし、自己像は自我の構成要素の単なる寄せ集めではなく、性格は他の要素と並ぶ自我の一構成要素ではない。真に性格とは、取得した役割群を全体的に組織化する主体の行為の統合様式であり、役割をはじめとする自我の他の構成要素から独立して存在するのでも、また、それらに還元されるものでもない。

自我形成は、行為の内実的統合化であると同時に自－他の内実的分節化でもある。弁別的特性を有する性格規定項目の各項は対立を構成する他方の項から独立して存在し得る実体的項ではない。性格の認知は自己の性格を規定する弁別的特性の一方の項に対する他方の項に規定された性格をもつ他者との「差異」において可能となる。自己は「鏡像体験」と同様、自己と他者との関係に生ずる

「差異」の中で自己の規定をなし得る。

「鏡像体験」による自他の形式的に分化した統合体制から内実的に分化した統合体制への移行の論理は非常に錯綜し、(イ)自己認識と他者認識、(ロ)実践的秩序化と認識的秩序化、(ハ)行為の統合化と自一他の分節化(主体内統一と主体間差異)は、それぞれ一方が他方の原因であるような単純な因果関係となっていない。これらの要因は自一他生成過程において相互依存的である。

(3) アイデンティティ

ところで自一他の分節化は、単なる自一他の同一関係から差異関係への移行、ないし自一他の未分離な状態から機械的に分離した状態への移行ではない。

第一に自一他の「癒合性」はパーソナリティ・システムの基層として、個体の発達史を貫いて自一他の根源的同一性と共同性を根拠づけている。個体の発達史における自一他関係の変化は、新たな体制による古い体制の置換・代替の関係ではなく、古い体制の上に新たな体制が構築される重層的、累積的關係である。精神分裂病に見られる自一他の可換性は、幼兒的状況の単なる再現ではないとはいえ、「癒合的」対人関係の上に築かれた統合体制が崩壊し、それまで潜勢化していた基底システムに働く作用が顕在化したことの結果と言えよう。

第二に、自一他の分節化は、一見逆説的だが、「癒合的」同一性とは異なる自一他の新たな同一性の獲得でもある。自一他の分節化は、自己に対峙する存在としての他者(契機)を自己のうちに取り込むことによって成立する。自一他の分節化は自己(身体)像と他者(身体)像との差異化として実現されるが、自己と他者の「差異」を構成するには、「差異」の現出を可能にするような同次元上に自己と他者を定立しなければならない。(このことが自我体験を二重の意識体験とさせる理由である。)[鏡像体験]および自我体験において客体化された自己と直接的主体である自己との対応性と連続性をア・プリオリに保障するものは何もない。自我体験でノエマ化された自己が過去の自己であるという事実(に対する認識)は、「鏡像体験」での認知操作が可視化された自己の部分身体と他者の鏡像身体との対応化を許容しないだけの役割しか果たさないと同様、対応化の必要条件でしかない。鏡像身体が可視化された実在身体の諸部分の総和ではないゲシュタルトであるように、ノエマ化された自己は、過去の自己の行為を素材としつつ新たに再構成されたゲシュタルトである。そして分節化の過程において自己から客観化され、対象化されたのは他者と同時に自己でもある。主体は、分節化され得る他者を定立したのと同じ規定性において自己を定立し、主体にとって自己(身体)像と他者(身体)像は等価である。結局、鏡像身体としての自己、客我としての自己の実質は、客観的には「他者」と言える。

ところが、現実の主体は客体化された自己を自己として同一視している。これは日常生活世界に生きる行為者の誤謬ではない。というのも、客体化された自己が自己にとって主観的に他者として現象するならば、客体化された自己と他者の関係は、いわば一個の他者と別の他者の関係となり、自一他の分節化=行為の統合化は成立しなくなるからである。自己は他者に対して自己となり、他者は自己に対して他者となる。だから他者と等価な存在として客体化された自己は、分節化=統合化の成就のために自己として同一視される必要がある。

アイデンティティは、以上の主体生成に関する「必要性」の観点から考察された自己(身体)

像に対する同一視の現象形態をなすものと言えよう。アイデンティティーは自己（身体）像との対応性、連続性の認知的検証の不可能という客観的原因と、環境に対する適応化をはかるための主体生成（＝行為の統合化＝自－他の分節化）の内発的原因に導かれて発生する。^{*} つまりアイデンティティーとは、他者に相関的な客我を他者ではない存在＝自己へと意味変換し、自己の個別的、統一的存在性を獲得する、いわば自己還帰的運動である。

^{*}アイデンティティーの喪失は対応化の認知的操作能力が損なわれていない場合にも生ずる。このことは客体化された自己に対する同一性は認知的対応化の操作だけで確認されるものでないことを意味している。

自己と他者は、自－他関係の中から析出される二要素である。行為の統合化の焦点は、各個別身体的主体としての自己、他者だが、行為の統合化は自－他関係の展開を通じて、すなわち自他の未分化な関係から形式的、内実的に分化した関係への移行を通じて、発展する。行為の統合化でもある自－他の分節化は非人称的な自－他の混同的状态から差異性を土台にした新たな地平のもとでの自－他の同一性の確立であった。そして行為連鎖の整合化と平衡化を可能にする統合体制の生成は、大局的には二段階の移行過程を辿ったが、その発展的移行を支配する論理は、基本的に同一であった。

3 社会システムの統合化

(1) 社会的統合メカニズム

次に社会システムの生成の論理と過程の問題に移ろう。

社会システムにおける行為の統合問題は、(イ)共同主観化されるべき情報に関する問題と(ロ)情報の共同主観化の仕方に関する問題とに大別できる。以下では(イ)に焦点をあて情報体系に作用する統合メカニズムを分析する。

社会システムにとって社会的関係は内部環境、自然は外部環境を成している。社会的統合化に課せられる課題は、外部環境と相互作用を行なう統一主体としての内部環境を形成することにある。広義の意味で社会は、「対自然関係」および「対人間関係」（マルクス）を包括する社会的活動の全体である。両者は相互依存的で、それぞれ一方の「関係」は他方の「関係」の組織化を前提にしている。情報体系は「対自然関係」と「対人間関係」全体を制御し、自然、人間、社会の間に統一の意味体系を確立して社会的統合化を達成する。

ここで未開社会と現代社会の情報体系を貫徹する普遍的な統合メカニズムに関する三つの仮説を提示しておこう。（図1・参照）

第一、情報体系の成立要件に関する仮説：社会的統合化は、社会の成立に不可欠な情報の集合—〈集合体としての情報群〉—が一定のメカニズムを通じて〈統一体としての情報体系〉に変換されることによって実現される。

第二、情報群の統合原理に関する仮説：〈集合体としての情報群〉を〈統一体としての情報

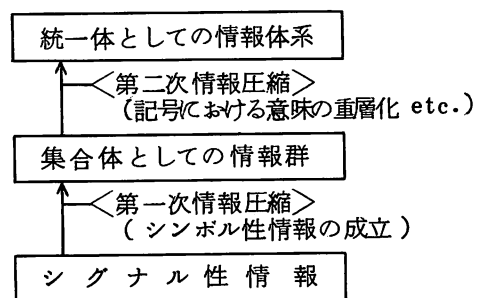


図 1

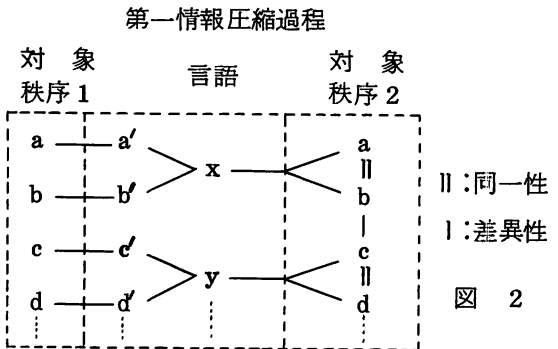
体系へと組織化する普遍の変換メカニズムは、言語情報の成立を第一次情報圧縮とした第二次（高次）情報圧縮である。

第三、情報群の統合様式に関する仮説：情報圧縮の形式にはいくつかの類型が存在するが、各歴史的社会的情報体系の生成に一貫して作用した情報圧縮は〈記号における意味の重層化〉である。

(i) 第一仮説および第二仮説について

言語（シンボル性情報）の成立と〈統一性としての情報体系〉の成立の間には、対象の秩序化に基づく主体の制御能力の拡大化という共通性が内在すると考えられる。言語は無数の多様性を持つ対象を分節・統合し、対象間に巨大な関係性のネットワークを形成している。役割体系としての社会的制度の確立を可能にし、社会的、物質的過程に対する制御の発展の基礎を築いたのは、言語の優れた一般化、類型化作用である。言語のこうした一般化、類型化作用は、情報論的に解釈すれば情報圧縮作用にほかならない。図2は言語による情報圧縮化と対象の秩序化の過程を示している。言語情報 x、y…は、各対象

に対応する情報 a'、b'、c'、d'…を圧縮して対象 a、b、c、d…を秩序化する。



そして情報体系は、言語の情報圧縮を第一次情報圧縮とした第二次情報圧縮作用によって、「対人間関係」、「対自然関係」に関する情報群 — 社会的関係、社会的技術、地理的自然、宇宙論的自然等に関する情報群 — の組織化を行ない、社会的統合化を実現する。ただし、情報体系は社会システムの分化に対応して歴史的に分化する。情報体系のもつ情報圧縮作用は、情報体系の分化、すなわち情報圧縮メカニズムの作用領域の分割、の介在によって高度化し、情報体系は環境的世界の一層の秩序化を志向して分化する。だから社会的統合化に必要なとされる情報群の全体は、つねに個々の具体的行為の中で直接的に組織化されているわけではない。とはいえ情報体系の分化は機械的分離ではない。情報体系は分割された各領域内での情報圧縮の一層の徹底と分割された領域間の有機的、間接的結合に成功する場合にのみ分化する。

近代社会および現代社会の情報体系は自然領域に関する情報体系と社会領域に関する情報体系の基本的分化を内在させた体系である。両領域に関する近代社会、現代社会の情報体系の分化は、近代科学（自然領域）と近代的法体系（社会領域）の確立とともに成立する。一般的命題体系である科学的法則も法体系も情報圧縮の所産である。

(ii) 第三仮説について

〈記号における意味の重層化〉は、ロラン・バルトによって二つのタイプに類型化されているが、（図3・参照）、この類型は〈記号における意味の重層化〉の全てのケースを網羅してはいない。バルトの類型を特殊ケースとして含み得る一般的類型として〈記号における意味の重層化〉を図4のように定式化することができる。類型〔A〕は対象に対応する複数の記号を単一の記号に縮減し、対象を組織化する。類型〔B〕は、記号表現、記号内容の同一、相違に関して類型

[A]と逆転しているにもかかわらず、情報圧縮を行ない、対象間の連関性を確立する。類型[B]で同一化される意味は、メタ言語と対象言語との関係を除外すれば、記号の辞書的意味ではなく象徴的、隠喩的意味である。だから類型[B]においても各記号は、辞書的意味とそれ以外の象徴的、隠喩的意味という複数の意味を内包する。各記号は明示的には同一記号へ縮減されないにもかかわらず、同一の隠喩的意味を媒介することによって対象間の連関性を確立する。

〈記号における意味の重層化〉と科学的法則は、情報圧縮メカニズムとして以下の特性を有している。すなわち〈記号における意味の重層化〉は、情報圧縮能力に関して有限だが、情報圧縮の作用領域に関して無限定的であるのに対して、科学的法則は、情報圧縮能力

に関して無限だが、情報圧縮の作用領域に関して限定的である。〈記号における意味の重層化〉は無限定的領域間の分散的統合化を、科学的法則は限定的領域内の集中的統合化を実現する。情報体系の統合水準および未分化一分化の程度は、基本的には情報圧縮メカニズムのこの特性に規定されている。

ところで〈記号における意味の重層化〉において、複数の意味の同時成立は、意味の混同と同一ではない。知覚的意識は対象を「地」に対する「図」として把握することで意味の一義的確定を可能にする。〈記号における意味の重層化〉が〈統一体としての情報体系〉を生成する情報圧縮メカニズムとして機能しているとするれば、社会的統合化は認識的秩序化の原理に基礎づけられていると言えよう。

(2) 未開社会と現代社会

未開社会と現代社会は、それぞれ社会的統合体制の原初的段階、発展的段階に位置している。未開社会と現代社会には、社会システム、情報体系の組織様態において対照的な相違が存在する。しかし両者の相違は統合水準の低い未分化な体制と統合水準の高い分化した体制との相違に由来する。

(i) 社会システム

未開社会の基本システムは互酬性交換システムである。互酬性交換システムは他集団に対する各集団の希少な生産物の譲渡様式として富の分配体系を成している。それに対して現代社会は市場原理と組織原理の展開によって形成された社会として位置づけることができる。パーソナリティ・システムが主体の行為を全体的に統合化するように、社会システムも内部環境の全体的統合化を目標として変化する。市場原理と組織原理は、ともに外部環境に対する適応化を志向して

図 3

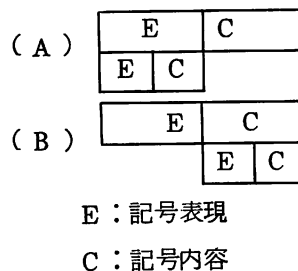


図 4

	記号表現の同一 記号内容の相違	記号表現の相違 記号内容の同一
シンボル	A ₁	B ₁
シンボル体系	A ₂	B ₂

類型[A] 類型[B]

作動する。

さて、互酬性交換システムと市場システムとの間には(イ)交換財；(ロ)交換行動、という交換システムの二つの基本的構成要素に関して次のような相違がある。互酬性交換の場合、交換財は経済的、宗教的、道徳的、審美的、性的価値をもつものすべてを包含し、交換行動の契機は、社会的連帯としての交換行動自体にある。そのため交換による相互供与の結果の不変性は、互酬性交換システムの存続に対して何の影響も及ぼさない。交換の主要な目的と意義は、互酬性交換システムの場合には交換行動自体に、市場システムの場合には利潤追求に置かれている。

しかしこうした差異の背後には、以下の共通性が存在する。

(a)統合契機：いずれの社会も集団内の垂直的、位階的關係を構成する統合契機と集団間の水平的關係を構成する統合契機を孕み、多数の異なる諸集団の統一的体系として成立する。この二重の統合契機は、二つの相補的なシステムを形成し、未開社会も現代社会（近代社会）も集団間の水平的關係として交換システムを形成している。

(b)社会システムの成立要件：一般に社会は(イ)個別主体（個人 or 集団）における利害追求の保障と、(ロ)個別主体間の連帯性の確保、という社会の存続と発展に必要とされながらも、時に乖離し、葛藤する二つの課題に直面している。社会システムの成立要件に関する両者の相違も絶対的ではない。未開社会は、最低限の利害追求を保障した上で、社会的連帯を優先させた社会であり、現代社会（近代社会）は、一定程度の社会的連帯を保障した上で、個別主体の利害追求を優先させた社会である。未開社会は、内部環境の安定的組織化（＝連帯）という消極的対処によって、そして現代社会は、外部環境に対する改変能力（＝生産力）の発展という積極的対処によって、外部環境に対する適応化を志向している。

(c)交換システムの構成要素：交換システムが制度化された社会の基本システムとして成立するためには、当該社会は、(イ)交換財と(ロ)交換行動を無規定のまま放置しておくわけにはいかない。交換過程の制度的關係への発展には、(イ)交換財に関しては交換の成立契機が交換当事者の欲求、欲望という主観性から引き離されて客観化される必要があり、(ロ)交換行動に関しては交換行動の動機づけが社会的作用によって強化される必要がある。

(イ)交換財：市場システムの発展は貨幣のメディアとしての象徴性、一般性に規定されている。貨幣は交換に必要とされる情報を価格（情報）に圧縮し、交換財を一元的に關係づけて市場における交換の普遍的可能性を保障した。市場システムは、交換過程に貨幣メディアの介在を通じて、交換財に関する相互連関体系の形成という問題を完成された形で解決した。交換システムの中には市場システムほど徹底していないが、交換の基礎を当事者の主観的欲求に委ねるのではなく、安定的システムの創造のための社会的規制を成立基盤にしたシステムが存在する。互酬性交換とはこのようなシステムと言える。互酬性交換は、交換財を象徴的連関性をもつ男財－女財に分類し、交換財に関する「類別システム」（村武精一）を形成していた。ここで両交換システムの比較において二つの異なる概念を区別することができる。それは、交換システムの形態を規定する変数要因としての〈交換財における機能的規定性〉と交換システムの成立の基底要因としての〈交換財としてのシステムの全体性〉である。〈交換財における機能的規定性〉は、市場システ

ムの場合には貨幣尺度で測定可能な側面、すなわち経済的側面に限定され、それに対して互酬性交換システムの場合には無限定的である。このように両システムは〈交換財における機能的規定性〉に相違が見られる。しかし制度化された安定的システムの成立のための基底要因を内蔵している点で両者は共通している。

(ロ)交換行動：互酬性交換システムは「経済システム」と「統合システム」(パーソンズ)が未分化な形で合体しているシステムであり、物的、人的資源配分様式としてA機能を担当し、同時に多数の集団の統一性を維持する潜在的コミュニケーション回路としてI機能を担当している。市場システムは、互酬性交換システムとは異なり、交換行動を義務化する必要はない。けれども市場システムでの営利志向行動も自然発生的基盤に立脚してはいない。営利志向行動の動機づけを提供し、市場システムを社会の支配的資源配分様式へと発展させた要因には、プロテスタンティズムの倫理の外に経済システムと統合システムのメディア間の意味的結合がある。「金銭的成功」(マートン)は、貨幣と影響力(名誉)の意味的結合と解釈することができる。市場システムは機能的分化の結果、社会の下位システムとして位置づけられる経済システムだが、経済システムおよび統合システムのメディア間の意味的結合を媒介に統合システムと連結したシステムである。だから交換行動に関する成立条件を充足している点で両システムは共通している。

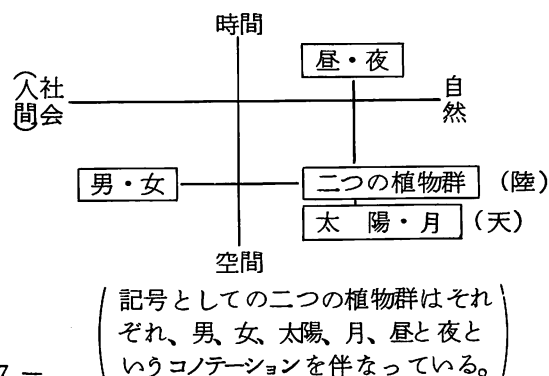
(ii) 情報体系

情報体系は自然、社会の全般的領域の組織化および各社会システムの成立に関する固有の課題の解決に成功した時、社会的統合化を達成する。各社会システムの成立に関する固有の課題とは、例えば未開社会においては、互酬性交換システムの成立条件の整備 — (イ)男財・女財の象徴的類別化と諸財の意味連関化、(ロ)交換行動の動機づけの一つの問題として「非調和体制」(レヴィ・ストロース)下における社会的緊張処理 etc — であり、現代社会、近代社会においては、発展した構造分化、機能分化の再統合化 etc である。

未開社会および現代社会(近代社会)の情報体系は、いずれも社会的統合化に関して課せられた諸課題を〈統一体としての情報体系〉の確立によって解決している。そして未開社会と現代社会(近代社会)の情報体系の関係は、社会システムの場合と同様、未分化な体制と分化した体制との関係である。

未開社会の情報体系を〈統一体としての情報体系〉として生成する情報圧縮の基本原理は〈記号における意味の重層化〉である。〈記号における意味の重層化〉は、トーテミズム、象徴二元論、神話、儀礼 etc、未開社会の情報現象の中に一貫して作用し、異質な意味的領域を統合している。(図5・参照)

例えばトーテム体系は集団相互間の関係と動物(植物)種相互間の関係との相互移行を可能にする変換装置として社会、自然の両領域を架橋し、多様な集団の統一的体系を確立している。またンデンプ族のイソマ儀礼は〈記号における意味の重層化〉を利用して、



「非調和体制」下に発生する社会的緊張の処理を病気の治癒という生理学的処方の意味変換し、行為者の個人的、生活論的意識に支えられた行動を社会の統合化行動へと誘導している。

未開の世界観は、従来未発達な主観性に関連づけられて説明されてきた。未開の思考と幼児の思考とは、抽象的な概念操作を行わず、人間と自然との間に連続的關係を設定している点で一致している。しかし未開社会の分類体系は、具体性の水準に留まるとはいえ対象に対する具体的関連性を保有しつつ論理的、思弁的操作によって再構成された体系である。未開の思考が人間、自然、の間に連続的意味連関を設定したのは、未分化で低い水準の生産力の社会形態に対する適合理化に起因している。つまり未開の世界観の生成を規定しているのは、未発達な主観性とは反対に社会的統合化の客観的要請と言えよう。

しかも、未開の世界観は近代的世界観にとって異質に見えるが、〈記号における意味の重層化〉は特殊歴史的な情報圧縮メカニズムではない。〈記号における意味の重層化〉は、分化した情報体系においては〈統一体としての情報体系〉の生成メカニズムとしての指導的地位を失っているが、なお現代社会、近代社会の情報体系の生成に関与している。構造と機能の各側面において分化した諸領域の統合化の際、現代社会、近代社会は未開社会の原初的統合体制を確立したのと同様の作用に依存している。

4 行為の統合システム

パーソナリティー・システム、社会システムに関する以上の考察を踏まえた上で、行為の統合システム一般について以下のことが言えよう。（説明省略）

(イ)行為の統合システムは環境に対する適応化を志向して、未分化な体制から分化した体制へと発展する。その移行過程でシステム内の諸要素は分離しつつ、機械的分離としてではなく、〈分離—再統一〉として有機的關係を構成し、システム全体は一層高度な統合体制を形成する。

(ロ)行為の統合システムにおける未分化な体制から分化した体制への移行を規定しているのは、行為を規制、制御している情報（体系）の一般性と抽象性の水準である。パーソナリティー・システムも社会システムも行為に対する規制の一般性と抽象性の水準の上昇に平行して発展する。

(ハ)行為の統合システムの生成は、主体内の相互行為の統合化、主体間の相互行為の統合化を問わず、行為を構成している諸要因の組織化を前提としている。

(ニ)未分化な体制から分化した体制への移行は、予定調和的に達成されるのではなくつねに統合システムの解体、もしくは原初的な未分化状態への退行の契機と可能性を孕んでいる。

文 献

- Barthes, R. 1967 Systeme de la Mode. 佐藤信夫訳『モードの体系』みすず書房 1972
- Lévi-Strauss, C. 1962 La Pensée Sauvage. 大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房 1976
- 1967 Les Structures Élémentales de la Parenté. 馬淵東一田島節夫監訳『親族の基本構造』番町書房 1977

Merleau-Ponty, M. 1953-1964. Eloge de la Philosophie L'oeil et L'esprit.

滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』みすず書房 1966

森田桐郎・望月清司 1974 『社会認識と歴史理論』日本評論社

Parsons, T. 1969 Politics and Social structure. 新明正道訳『政治と社会構造』誠信書房 1974

Piaget, J. 1972 Problèmes de Psychologie Génétique. 芳賀純訳『発生的心理学』誠信書房 1975

Saussure, F. 1949 Couts de Linguistique generale. 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店 1972

吉田慎吾・浦生正男(編) 1974 『社会人類学』有斐閣

渡辺 慧 1978 『認識とバタン』岩波書店

(まさむら としゆき)

ソシオロゴス 原稿募集

以下の要領で、『ソシオロゴス』第4号の原稿を募集します。

※内容＝社会学および隣接諸分野に関する研究。

※形式＝(原則として)日本語、英語で書かれたもの。400字詰40枚程度。論点を十分に論じ、かつ、できるだけ簡潔な論文が望ましい。

※締切＝1979年12月10日までに、ソシオロゴス編集委員会に提出する。ただし、寄稿(予定)者は、その旨(また、やむをえない事情により、締切日よりあとでなければ原稿を提出できない寄稿者は、そのことを含めて)、同年11月10日までに、同委員会に、あらかじめ通知して下さい。

※寄稿資格＝所属、専門、職業など、一切問いません。

※負担＝寄稿者は、掲載される原稿の分量に応じて、然るべき負担をしていただきます。実際の負担額は、編集が完了しないとはっきりしませんので、ソシオロゴス編集委員会にお問い合わせ下さい。

※本誌に掲載した論文の著作権は当委員会に属しますので、予め御了承ください。

※発行予定日＝1980年5月1日。

1979年6月1日

ソシオロゴス編集委員会